

創 発の会

座長 斎藤 敏一
(ルネサンス 取締役社長)

自分なりのテーマを見つけて 昇華させていく場にしてほしい



斎藤 敏一

さいとう・としかず

1944年宮城県生まれ。67年京都大学工学部卒業後、大日本インキ化学工業入社。67年より2年間スイス連邦工業大学留学。69年帰国後、研究所、海外事業部を経て、79年企業内ベンチャー事業としてスポーツ事業を企画。大日本インキ化学工業100%出資にてディッククリエーション（現ルネサンス）を設立して出向、後に転籍。92年6月に代表取締役社長に就任。

99年経済同友会入会、2001年度より幹事。2001～2003年度創発の会副座長、2001～2002年度「市場の進化」と21世紀の企業」研究会座長、2003年度社会的責任経営推進委員会副委員長、2004年度社会的責任経営推進委員会常任委員、2005年度社会的責任経営推進委員会副委員長、2006年度創発の会座長。

「会」の親しい雰囲気が 研究会の結成につながった

経済同友会が大切に受け継いできたテーマの中で、私にとって最も重要なものは「企業の社会的責任」です。歴史を振り返ると、経済同友会設立の翌年、1947年に早くも『企業経営の民主化』を発表しています（注1）。また、1955年の同友会第8回全国大会で、経営の基本的理念としての企業の公器性、社会的責任を明言しており、翌1956年に『経営者の社会的責任の自覚と実践』を発表しています（注2）。今日では「CSR」という言葉を知らない経営者はいないくらい一般的になりましたが、エポックメイキング的にこの理念を発信し続けたのは経済同友会です。こうした伝統は若い会員の方々にもぜひ継承して行ってほしいものです。

私自身の経験で言うと、2000年

12月に発表された『21世紀宣言』に感動し、「市場の進化」という考え方をより身近なものとして勉強しようと思いました。そして、会員自主プロジェクト「社会貢献型企業研究会」を立ち上げたのですが、そのベースになったのが創発の会です。そこで知り合えた方たちと研究会を作ることができました。経済同友会に親近感を持っていたのも、自発的な活動がうまく始動できたのも、創発の会のおかげです。今も昔も、創発の会には個人的に親しく話のできる雰囲気があると思います。

経営者同士で勉強して 人間力を高めてほしい

誰しも入会当初は緊張するものです。それをほぐすのが創発の会だと思います。私が新入会員として参加していた頃、創発の会のメンバーは数十名ほどでした。ところが人気が高いようで、今は160名

創発の会

副座長（メンバー163名）

- ・ 稲田 和房
（クレディセゾン 常務取締役）
- ・ 梅田 一郎
（ファイザー 取締役）
- ・ 梶 明彦
（ジャルパック 取締役社長）
- ・ 濱口 敏行
（ヒゲタ醤油 取締役社長）
- ・ 平田 正之
（エヌ・ティ・ティ・ドコモ 取締役副社長）

（役職は9月25日現在）
（インタビューは9月12日に実施）

にまで増えました。その分、家庭的な雰囲気がやや薄まった感じもします。やっている内容は変えずに、より多くの方と親しい話ができるような場作りのためにいろいろと工夫をしているところです。今年は、この会の運営が私の経済同友会での一番の仕事です。

経済同友会に入れば皆同じ経営者であって、上下関係も何もありません。こうした場はとても貴重です。その中で自分なりの問題意識を持ち、たくさんの人との会話の中から身近なテーマを昇華させていくことが大事だと考えます。そのための場として創発の会を活用してほしいと思います。

人間力を高めるための勉強の機会が、創発の会以外にももっとたくさんあっていいと思います。哲学や歴史を古典から学ぶ、あるいは新しいものを吸収する。同じ経営者として共に学んでいこうという動きが、例えば会員自主プロジェクトとして創発の会から外へ向かって核分裂のように広がっていくことを期待しています。経営者は仕事を離れた青臭い議論をもっとするべきで、その場を経済同友会内に持ってもらいたいのです。

注1……1947年8月、経済民主化研究会（大塚萬丈委員長）が発表した。
注2……1956年11月、経営方策特別委員会（井上英照委員長）が発表した。